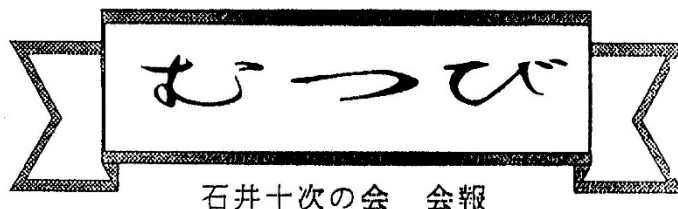


2021年  
(令和3年)  
7月13日



286号

## 我が国の社会福祉の礎を築いた渋沢栄一と石井十次の功績

特別養護老人ホーム  
リバーサイド学園木花  
施設長 三浦 順一

今回のNHK大河ドラマは「晴天を衝け」である。毎週、放送される4K画像、5.1chサラウンドで、目まぐるしく展開するドラマを観ることは、楽しみの一つとなっている。

### 1 渋沢栄一の功績

主人公の「渋沢栄一」は「近代日本資本主義の父」と言われているが、実は、我が国の社会福祉発展に偉大な功績を残している。（「ゆうあい通信 第345号」で児嶋草次郎理事長が詳細に書かれている）

当時、東京には、物乞いや浮浪者（当時の言葉）がいたため、これを収容し、食を与えるために養育院が造られた。栄一は、最初の福祉の関わりとして、養育院長の職務に当たった。

「仁になせば則ち富まず、富めば則ち仁ならず、利につけば仁が遠ざかり、義によれば利を失うというように、仁と富を全く別物に解釈してしまったのは、はなはだ不都合の次第である」

人間の弱いところとして、自分の利益を追求し過ぎて、道徳を後回しにしてまで金銭を重要視する。実業家たちは経済を考える時、仁義道徳を切り離してしまう。このことは、大きな欠点だと指摘した。

後に、栄一が著した「論語と算盤」にあるように、商業の復興のためには、道徳と経済が合一でなければならないと説いた。

福祉が人々の経済的な保障を行うことは、公益の追求に通じる。福祉と倫理、そして、経済が調和することを目指したのである。

また、栄一は、人が困窮すれば社会に混乱を招くので、窮民を救う慈善事業を行った。

慈善事業は、混乱を防ぎ、人々に安寧・福祉を保障するものでなくてはならないと言っている。

つまり、未然に貧困を防ぎ、安寧・福祉をもたらすという「救貧」から「防貧」へとという考え方である。

### 2 石井十次の功績

渋沢栄一と同時代を生きたのが我が郷土の偉人「石井十次」である。

十次は日本で最初に孤児院を創設し「児童福祉の父」と言われている。

最初に携わるのは、貧しい巡礼者の男の子を預かったことから始まる児童救済事業である。

その後、岡山孤児院で多くの孤児を救済し、茶臼原へ理想郷づくりのため、帰郷する。エミールの影響を受け、大自然がある茶臼原で、子どもたちを自由に遊ばせ、学ばせ、働かせたいという思いがあったからである。

ところで、福祉を行っていくためには膨大な資金が必要である。当時、それを税金で賄おうという気運は「富国強兵」の世の中、政府にも国民にも高まる状況ではなかった。

そこで、渋沢栄一は持ち前の事業家としての利を生かし、知名人からの寄付とそれを投資していくことによって、資金を調達した。

石井十次も、同じように個人の善意や寄付に頼った。「孤児教育会趣意書」を作成し、自らがクリスチャンということもあり、キリスト教関係者にも協力を仰いだ。少年音楽隊を編成し、日本全国、韓国、台湾、中国など巡回させ、寄付金を募った。

さらに、茶臼原の開墾に着手する。開墾した畑には米、麦、大豆、蕎麦、芋などを作った。養蚕を始め、生糸の生産ができるようになった。

自給自足と共に、資金が充足でき、描いていた理想の暮らしができるようになったという。

また、十次は、子どもたちに救貧だけでなく、防貧を深く考えていた。

「救貧」とは、例えば、貧しい人に魚（食べ物）を与えることである。だが、それだけだと、食べ物を与え続けられない限り、貧しさは変わらない。

それに加え、釣竿を与え、魚の釣り方を教える、これが「防貧」である。自分で魚を釣ることで食べ物を得られ、貧しさを防げるようになるのである。

十次は孤児に衣食住を与える「救貧」だけではなく、教育「防貧」を行った。

「密室教育」や「ライオン教育」に加え、子どもたちが将来自立できるように職業訓練を兼ねた「事業部」を作った。活版や機織りなど職業技術を指導したのである。

子どもたちが将来、人格を備え、自立する力（釣竿と魚の釣り方）を発揮できるように教育に力を入れたのである。正に「防貧」そのものの考え方である。

### 3 偉人たちの功績から見えてくる社会福祉の本質

上述したように、渋沢栄一、石井十次の偉大な功績から社会福祉の本質が見えてくる。

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>(1) 社会経済の発展と道徳（社会福祉）は両輪である。</li><li>(2) 社会福祉には膨大な資金が必要である。当時は個人の善意や寄付に頼った。</li><li>(3) 社会福祉は救貧とともに防貧という考えが重要である。</li></ol> |
|--|

では、現代において、この社会福祉の本質がどのように生かされているのであろうか。

(1) については、時代を追って、社会全体で社会福祉の重要性が認識され始めている。

課題は多いが、経済と社会福祉の発展を両輪に近づけようとしている。

(2) については、社会福祉制度が確立され、財源は税金から投入されるようになった。

(3) の「防貧」については、社会保障制度として、年金保険、医療保険、介護保険、雇用保険、労災保険等が確立されている。

他方「救貧」は、生活保護制度により「防貧」によっても貧困を免れない国民に最低限の生活保障が行われている。

このように、二人の偉人の本質を踏まえた偉大な功績は、我が国の社会福祉の大きな礎となっているのである。

#### 4. 正一、開墾地を新田村湯風呂にきめる



正一は県庁に勤めながら計画に着手した。土地を物色したところ、新田村湯風呂の官有地の原野が気に入った。自宅から1里半あったが歩いて通えた。雑木の山や谷のある起伏の多い台地だった。

湧き水もあった。原とよばれるなだらかな台地ではない。開墾しにくい土地だった。選んだ理由はリスク分散である。原は開墾しやすいが旱魃や台風の被害を受けやすい。山や谷の起伏があれば、開墾はやっかいだが旱魃や台風被害は軽くてすむ。払下げ対価を支払うためには給料では足りず、牛を繁殖させ子牛を売って資金を貯め、2年かかって支払った。自宅を解体して湯風呂に運んだ。



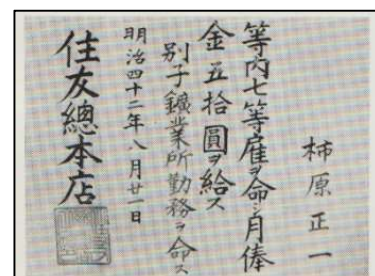
柿原政一郎

#### 5. 勤務しながら開墾事業

明治25年5月、払下げの許可が下り開墾事業を開始した。土地は自分で所有するが、一人で開墾するには広すぎるので、同志となる農民を募って入植させ、共に開墾する。入植した農民からは一定の上納をさせ、3年たつと開墾した土地は農民に無償で与える。同志の第1号として財津徳次郎、続いて片山嘉藤太が家族をつれて入った。いずれも四国から開拓農家を目指して日向国に来た人たちであった。正一は湯風呂には四国出身者しか入れなかった。正一は、自分が日向人でありながら、日向人の「てげてげさ(中途半端なこと)」を知っていた。四国人は日向人にならぬ勤勉さと忍耐強さがあった。四国は土地が狭かったので、集約農業が発達した。農地を無駄なく耕作し、農閑期を設けなかった。長男しか家督が継げず、次男以下は他所へ働きに出なければならなかった。彼等には忍耐強さと勤勉さが身についていた。正一はのちには十次と相談し孤児院出身者4人を入れた。自給自足を目指したが、はじめのうちは米も十分できず、生活費が足りない。正一は県庁勤めの給料を割いて入植者に賃金として支払った。米だけでは現金収入が足りないので、換金作物の栽培もした。多忙で貧しかったが、正一は費用を捻出して四国や紀州まで出張し、専門の柑橘農家をたずねて果樹栽培の指導を受けた。みかん、ぶどう、柿などを植え椎茸栽培もして、現金収入を増やした。正一は入植者の面倒をよく見た。自立できない者には生活費を支給して支えた。借金をこしらえた者には、本人に黙って肩代わりした。急に借金取りが来なくなったのを不思議に思った本人が調べると真相がわかった。年末に各家をまわって餅をくばるのは妻・きみの役目だった。

#### 6. 政一郎の学費稼ぎに住友に勤める

明治32年、政一郎の宮崎中学卒業が近づくと、学費が必要になった。少しでも給料の多い職を求めて上阪し、大阪西区役所に勤めた。湯風呂の管理は財津と片山にまかせた。その年11月、住友の鈴木馬左也に会う。鈴木馬左也は高鍋出身で、東京帝大を出ると内務省に入った。内務省から愛媛県に出向していた明治29年に住友家から招かれる。



住友の辞令「月俸五拾圓」

鈴木は内務省を辞め住友に入社した。入社と同時に住友本店の副支配人となった。明治37年には住友総理事となる。正一が会った時は別子鋳業所支配人を兼務していた。鈴木に頼んで住友に雇ってもらうことにし別子鋳業所のある新居浜市に引っ越した。馬左也の指示で岡山孤児院への四国一円の寄附金集めの世話役も兼任した。住友は正一が能吏であることを認め高給(月給50円)で処遇した。ちなみに大阪西区役所の月給は17円だった。(次号に続く) 編集委員 石川正樹

★新会員のご紹介（敬称略）

【宮崎市】石原 信也（有）戸敷興業  
【都城市】森 由記子  
【西米良村】中武 幸子

★ご寄付をいただきました（敬称略）  
（一般）

【宮崎市】黒水 斐子  
【都城市】株ヨシダ  
【西都市】福田 由美  
【高鍋町】友草 孝一  
【福岡市】貝島 由香  
【取手市】森 邦彦  
（奨学金基金へ）  
【宮崎市】横山 久美子 荒武 真奈美  
谷口 眞由美  
【延岡市】川並 順子  
【高梁市】平松 丈平  
【福岡市】貝島 由香

★5/21～6/20の資料館来館者  
団体・グループ 0人  
個人 21人  
計21人

ここまでの掲載者は編集委員会開催の都合により6月20日までのものとしています。

★8月号の通信発送作業

8月11日（水）9時から印刷・製本  
12日（木）9時から印刷・製本

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

社会福祉法人 石井記念友愛社

☎ 884-0102

宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1  
後援会「石井十次の会」

TEL/FAX 0983-32-4612

メール

[yuuaisya-jyuujinokai@ki.jo.jp](mailto:yuuaisya-jyuujinokai@ki.jo.jp)

●編集委員会近況報告

編集委員会は本年度も月末に方舟館にて開催しています。

①編集委員を紹介

竹之下悟 編集委員長(西都市)  
生駒 亮 編集委員(高鍋町)  
徳地順子 編集委員(高鍋町)  
石川正樹 編集委員(高鍋町)  
松下さおり 編集委員(宮崎市)



5月25日の編集委員会

主として、届いた原稿の検討(この日は橋田会長も出席)

②業務は、編集委員会会則に次のように定めています。

「石井十次の会」主宰の「むつび」4頁分の内容に関する企画・依頼・取材・校正・発行等

原稿依頼は会員や有識者に偏りのないよう公平性にも努めています。

もちろん十次の教えを基盤とした執筆をお願いすることになります。

編集委員長としては原稿依頼がスムーズに進行できる事は極めて重要な案件です。

★編集後記

「むつび」巻頭は宮崎市特別養護老人ホーム施設長 三浦順一氏から玉稿をいただきました。今をときめく渋沢栄一の十次との接点や「論語と算盤」などは大きな私の学びとなりました。ありがとうございました。

※文責 竹之下